

ビザンティン美術における三位一体と聖母マリア

横川典古*

はじめに

エーゲ海に浮かぶパトモス島は、キリストの十二使徒の一人である聖ヨハネが、天啓を受けて『黙示録』を記した所として知られている¹⁾。この島には、コムネノス朝の初代皇帝アレクシス I 世が、1088 年に命を出して建立させた神学者聖ヨハネ修道院がある。より正確に言えば、この命はアレクシス I 世の母親であるアンナ・ダルシアの願望によって発令されたことが、わかっている。²⁾

伝承によると、聖ヨハネが天啓を受けながら弟子のプロコロスに筆記させた場所は、アポカリプス（黙示録）の洞窟と呼ばれ、そこに小さな教会堂が設けられた。教会堂の北の部分は聖アンナ³⁾に、そして南の部分（ここには神秘的な三つの裂目を持つ大きな岩がある）は聖ヨハネに捧げられている。この教会堂は 12 世紀に建てられたと考えられているが、内部にはその当時に描かれた聖ヨハネとその弟子プロコロスの姿が、フレスコ画として残っている。

聖ヨハネ修道院は、このアポカリプスの洞窟の近く、パトモス島のホラの町の丘の上に位置している。本研究で取り上げる〈アブラハムの歓待〉（三位一体）図と、〈玉座の聖母子〉図は、聖ヨハネ修道院のカソリック（主聖堂）に隣接する聖母チャペルのアプシス全面に描かれている（図 1）。ここで注意しなくてはならないのは、〈三位一体〉は、図像学的には、〈アブラハムの歓待〉というイメージによって表現されていることである。そしてそのことは、この図像には聖餐の意味も含まれることを暗示しているのであるが、それについては本論の中で触れることになるであろう。

聖母チャペルにおけるこの二つの図像の配置及び組み合わせは非常にめずらしいもので、聖堂アプシスの

主題図像としては、これ以前にも以後にも見当たらない。図像の配置に関しては、前回の拙論⁴⁾で、その解明を一応試みたが、アプシスに〈アブラハムの歓待〉図像が存在する明確な理由については、依然として謎のままである。しかしながら、二つの図像の一方である〈玉座の聖母子〉は、古くから表現されてきた図像であり、ことに聖像論争後の 10 世紀からは、アプシスにこそふさわしい図像として多く採用された。何故なら中期ビザンティン時代の空間ヒエラルキーにおいて、東端のアプシスはイエス・キリストの降誕の地であるベツレヘムを象徴する天上のベツレヘムであり、そこは聖母のための空間として考えられていたからであった。又、聖ヨハネ修道院聖母チャペルのフレスコ画に見られる、二大天使（ミカエルとガブリエル）を伴うタイプの〈玉座の聖母子〉は、やはり聖母チャペルと同時代の 12 世紀前後に数多く登場している⁵⁾。

したがって問題となるのは、〈玉座の聖母子〉図像に何故〈アブラハムの歓待〉図像が組み合わせられたのか、ということになる。又もう一つの問題点として、アプシス図像としてでなければ、聖ヨハネ修道院聖母チャペル以降の時代において、この二つの図像の組み合わせが、特に典礼用具の中に見い出されることがあげられる。

本研究の目的は、こうした二つの図像の組み合わせの意味を探ることにあるが、今回は〈玉座の聖母子〉図像に焦点を当てて、聖母マリア像表現の視点から考察をすすめていきたいと思う。

I 〈アブラハムの歓待〉と〈玉座の聖母子〉

これから二つの図像が組み合わせられた代表的な作例を、4 点概観していくこととするが、どれも時代的には聖ヨハネ修道院聖母チャペルの壁画より、年代がはるかに下っている。早いもので 15 世紀であるから、

* 本学キリスト教人間学科助教授
(西洋美術史・キリスト教図像学)

約3世紀間のブランクがある。この間に作例が皆無かどうか断定はできないが、筆者の知る限りにおいて、典型的な作例は見い出されていない。

1. 聖ヨハネ修道院所蔵のパナギアリオン (図2) ニコラオス・リッツォス作, 15世紀末

この作例については、すでに拙論で述べているが、ここでは、《二大天使を伴う玉座の聖母子》について再考したい。二大天使とは、ミカエルとガブリエルのことである。聖母チャペルのアプシス壁画と比べると、こちらは円形という枠組の制限からくる形態上の変形が余儀なくされている。しかし中央の聖母子は厳格な正面性を持って表現されており、玉座の背もたれはないものの、聖母チャペルの作例の伝統が受けつがれていることが確認できる。

作者はクレタ島の有名な画家アンドレアス・リッツォスの息子、ニコラオスではないかと推測されている。聖ヨハネ修道院は父親アンドレアス作のイコンも収蔵している。《パンタナサの聖母》と呼ばれている作品で、15世紀中頃とみなされているが、聖母と幼児イエスの姿勢と手のポーズ等、共通点が多い。

円の枠を注視すると、赤字による文章が書かれているのが認められるが、これは修道院の食堂で、食事の間に行われる聖母の“賞揚の祝い”におけるマリアの祝詞⁶⁾である。パナギアリオンとは、聖餐用のパンを入れる皿のことであるが、ギリシャ語で「こよなく聖なる」を意味するパナギア(παυαγια)から来ている言葉であり、処女マリアを示している。

パナギアリオン自体は10世紀から11世紀にかけてすでに現われており、そうした作例の一つとしてアトス山のヒランダリ修道院に属するものが知られている。しかし15世紀になると、それまでの皿状のものから箱や二つの円盤を合わせて作られたペンダント、則ちここで取り上げているパナギアリオンの形へと変化したことが指摘されている。このことから明らかなのは、《アブラハムの歓待》と《二大天使を伴う玉座の聖母子》の図像がコンビネーションとして描かれるようになったいきさつには、パナギアリオンの形態の変化が関係しているということである。これだけではこの二つの図像の組み合わせの意味は説明できないのであるが、ここで推測できることは、聖母の典礼の中で、聖母と三位一体の秘儀との結びつきが強くなったということではないだろうか。

2. せいうち牙製のパナギアリオン (図3) モスクワ, 16世紀

直径7.2cmのこのパナギアリオンは、旅行の安全を守るミニアチュール・イコンとして使用されていた⁷⁾。左の円盤中央には、ルブリョフの有名な《三位一体》イコンに見られるのと同じタイプの《アブラハムの歓待》(三人の天使)が表わされており、又、右の《聖母子》は印(しるし)の聖母と呼ばれるプラテュテラ型の聖母子像で、ロシア的特色にあふれている。

印又は徴の聖母というのは、預言者イザヤの預言が記されている旧約のイザヤ書7章14節に、「それゆえ主はみずから一つの印をあなた方に与えられる。見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルととなえられるであろう。」からとられている。

プラテュテラ(πλατυτερα)とは、ギリシャ語で天空よりも広いを意味する言葉で、処女マリアが、全宇宙でさえ含むことが不可能な創造者である神御自身を、自分の胎へ宿し持つに至ったことを表わしている。この呼び名は、聖バシレイオスの聖体礼儀の中の「神母讃歌」からとられた。この中に注目すべき言葉が見出せるので、以下に示す⁸⁾。

「恩寵満ちてるものよ、汝の裡にて
全世界と、天使らの位階と、
人々の種とが悦べり。
聖別されし寺院よ、靈なる庭よ、処女なる栄光よ、
汝の裡にて、幼児は
世々の前に我らが神たりし者と成られ給へり。
汝の胎より、彼は玉座を作り給へり。」⁹⁾

3. ヒランダリ修道院所蔵のイコン (図4)

このイコンの場合には、二つの図像がともにバリエーションとなっている。左の《アブラハムの歓待》では、楕円形のテーブルの向こう側に三人の天使が一行に並び、手前側にはアブラハムとサラが極端に小さく描かれ、シンメトリーの構図が強調されている。又、右の《聖母子》の方も、上記のモスクワで製作されたパナギアリオンと同様に、プラテュテラ型の聖母子像で、やはりシンメトリーの構図となっている。この場合には四人のケルビム天使¹⁰⁾が加えられており、さらに手前には二人の聖人サヴァとシメオンが、左図のアブラハムとサラのごとく、極端に小さく描かれていて、表現上における大きな特色をなしている。

Lazovic と Frigerio-Zenion は、この聖母子像の画面

は、「まことにふさわしき」を意味する“Axion Estin”と呼ばれる聖母の典礼歌の挿絵と同じであることを指摘している¹¹⁾。伝承によると“Axion-Estin”のイコンには、聖像破壊論者の剣に傷つき、血を流しながらコンスタンティノーブルから海を渡ってアトス山にたどり着いた後、ある見知らぬ者が、“Axion-Estin”の語で始まる未知の聖母讃歌を唱えると、出血が止まったという話が秘められている¹²⁾。

聖サヴァと聖シメオンは、ビザンティン帝国領であったアトス山に、ヒランダリ修道院を建立した聖人である。修道士サヴァは、セルビア王国のネマニッチ朝の始祖ステファン・ネマーニャの末子で、ステファンと共に王立のヒランダリ修道院創設に奔走した。由にこの修道院はセルビア国家を代表する機関にもなっていたのである。

4. 預言者エリヤ修道院所蔵のイコン (図5)

クレタ島 (ギリシャ) 1753年

一枚のイコンの中に《聖ヨハネの黙示》と《二天使を伴う玉座の聖母》という二つの図像が描かれたためずらしい作例であるが、このイコンからは、《三位一体》と《二天使を伴う玉座の聖母》の二つが、深く結びついていることが明確に読み取れる。

《聖ヨハネの黙示》は三つの場面から構成されている。上部右側に描かれているのは、要塞のような外観を持つパトモス島の聖ヨハネ修道院であり、下の部分には聖ヨハネとその弟子のプロコロスが、御使いに導かれて、洞窟の中で黙示録を執筆している光景が描かれている。

さて、ここで注目すべきは上部左側の場面である。連なるケルビムがいる楕円形の雲の中には、老人の相貌で座したまま両手を広げる父なる神、立像で右手を上げながら左手には開いた本を持つ子なる神キリスト、そしてハトの姿をした聖霊なる神、則ち三位一体の神が具体的に描かれている。こうした三つの場面を自由に組み合わせた試みは、新しい表現法と言える。

一方《二天使を伴う玉座の聖母》の方は、伝統的な聖母子像タイプである。表現法も、幼児イエスが聖母の左ひざの上ののっぺはいるものの、全体的にはシンメトリーの構図であり、厳格なフロンタリティーを守っている。

二人の天使はかなり小さなスケールで、しかも玉座の背後に描かれているが、このような特色は次に示すように初期のものに多く見られる方法である。図6は

シナイ山の聖カテリーヌ修道院所蔵のイコンで6世紀のものである。又、図7も同じく6世紀に作られた象牙板である。6世紀になると、こうしたタイプの《玉座の聖母子》像表現が、数多く登場してきていることに注目すべきであろう¹⁴⁾。

II 《セオトコス》とマリア典礼

この章では、聖母マリア図像の形成に関して、6世紀頃の時代がどのような影響を持っていたのかについて探ってみたい。そのためにI章でもすでに触れた6世紀における《二天使を伴う玉座の聖母》図像についての考察から始めることにする。まず二つの代表的なモザイクによる作例を概観してみよう。

1. エウフラシアナ教会堂アプシスモザイク (図8) ボレク(ユーゴスラビア) 543年—553年

この作例はアプシスに描かれているのみならず、聖母子像の厳格な正面性、さらに二天使が聖母子像の両脇に待するシンメトリー構図が際立っていることから、後のコムネノス朝時代に多くみられるアプシス図像の先例と言えよう。

天使の右側に並ぶ聖人達の名前は知られていないが、左側には、ボレクの最初の主教である聖マラウスが、次にはこの教会堂を建立したエウフラテス自身が教会堂のモデルを手にして、さらに左端には副主教のクラウディウスとその息子が表わされている¹⁵⁾。彼らが立っている場所には花々が描かれ、楽園の雰囲気がかもし出されており、それはさらに彩雲たなびく金地の背景によって強調されている。雲の中から聖母の頭上に向けて冠をさし出す手は、不可視的な存在である神の臨在を示すシンボルで、神からの特別の恩寵を意味している。こうした表現上の特色は、アドリア海の反対側に位置するイタリアのラヴェンにおける同時代のモザイク装飾と非常によく似ているので、共通点を探りながら、次の作例を観察してみたい。

2. サンタポリナーレ・ヌオーヴォ聖堂の 身廊モザイク (図9) ラヴェンナ (イタリア) 6世紀後半

《四天使を伴う玉座の聖母子》は、バジリカ式会堂の身廊北壁面下段に位置しており、反対側の南壁面にあって同様の図像学的構図によって作られている《四天使を伴う玉座のキリスト》と対をなしている。キリストの玉座と同じく大きな緋色のクッションの上に座す聖母は、やはりキリストと同色の紫色のチュニックとマントを身にまとい、こうしたデザイン構成からは、聖母の威厳を強調する意図が読みとれる。

又、幼児イエスの衣が、四人の天使達と同じく白地に金のストライプ入りであることは、エウフラシアナ教会堂の作例とも共通していることを示している。聖母の衣の紫色は、色のシンボリズムによれば、古くから王や貴族等の高位者にのみ許されたロイヤルカラーであり、これは先に示したシナイ山のイコンにおける聖母の衣の色とも共通している。

以上のような特色を持つ聖母子像を、Bovini はギリシャ型のセオトコスであると述べているが、このタイプの形成には、マリア論とでもいふべき神学論争が関わっているのだから、次にセオトコスの問題について触れておきたい。

東方教会におけるマリアの呼称は、パナギア (聖女) とセオトコス (神の母) とに代表される。このうちセオトコスの方は、キリスト論に関する教義として、初期キリスト教時代の重要な神学的問題であった。

コンスタンティノポリスの大主教ネストリウスが主張するクリストコス (キリストの母) なのか、アレキサンドリアの総主教キュリロスが主張するセオトコス (神の母) なのかをめぐって論争が起きたが、教父たちがセオトコスという称号にこだわったのは、クリストコスという称号では、人性と神性を併せ持つイエス・キリストの神性面がないがしろにされると考えたからである。エフェソス総会議においてキュリロスは、ロゴスは完全な人性を獲得し、キリストの肉体は神の生命として作用するのであるから、マリアは神の母であると説明して承認を得たが、論争が完全な決着を見たのは、451年のカルケドン総会議においてであった。

エフェソスといえば、ここは聖ヨハネが『福音書』を記した所であり、5世紀中頃には記念堂兼教会堂も建てられていた。又、聖母に捧げられた教会の第一次建築は、すでに350年頃着工されたと考えられている。

そしてエフェソス総会議は、この聖母大聖堂で開催されたのであった¹⁶⁾。

こうしたマリア論の進展を背景に、マリア賛歌も登場してきた。よく知られているアカシストス賛歌は5世紀から6世紀にかけて存在した伝説的人物ローマノスの作といわれている。このマリア賛歌は、626年にコンスタンティノポリスがペルシャとアヴァール族からの攻撃を受けたとき、聖母マリアに祈って勝利をおさめたのを記念して、レントの第5週目の土曜日に歌われたことが記録に残っている¹⁷⁾。

首都のコンスタンティノポリスでは、5世紀にカルコプラティア聖母教会が建立された。一説によると、これはアルカディウス帝の娘であるプルケリアが、アマシアの東方ゼラで得た聖母マリアの帯 (ゾーネー) を祠る小礼拝堂と共に発願したものだという。

又、プロコピオスによれば、6世紀にはブラケルナイ聖母教会がユスティニアヌス大帝によって建立されたが、こちらも一説によると、プルケリアが、イェルサレムのゲッセマネの教会で得た聖母の被布 (マフォリオン) を祠るために建堂されたという。

さらに、後にホディギトリア型聖母子像を産みだしたことで知られるホデコス修道院も、聖母マリアに捧げられた聖堂で、プルケリアによって5世紀に建立されたといわれる¹⁸⁾。

プルケリアは、エフェソス及びカルケドン総会議でのキリストと聖母マリアとの関係について、キュリロス派の意見を擁護したとも伝えられており、彼女の数々の宗教的業績は、聖母マリア崇拝が、コンスタンティノポリスを中心に高まっていく基盤を作ったといえよう。

6世紀には、さらに興味深い聖母マリアの修道院が、ユスティニアヌス大帝によって、テオドシウス城壁の外のシリプリ門の反対側に建立された。その場所は古くからあったマリアの聖所で、そこには木々に囲まれた泉があり、その水は奇跡を起こすと信じられていたのである。8世紀の女帝イレネは、自身の大出血を、この水を飲むことによって癒すことができたおかげで、聖母修道院を手厚く保護し、立派な建物も造った。

その後大災や戦争の被害を受けながらも再建され、Zoodochos Pigi (生命の泉) の奇跡は14世紀に至るまで起こり続けていたことが、ニケフォロス・カリストス・クサンソポロスの記録によって知られている。彼は又、Zoodochos Pigiの聖母に捧げるための祭礼儀式も作り、それはイースター後の金曜日に執り行われたのであった¹⁹⁾。

オスマントルコの占領によって、この修道院は1422年に失われてしまったが、9世紀頃からすでに始まっていたZoodochos Pigiの典礼資料を基にアイコンが製作されるようになり、14世紀のクサンソポロスの時代には、明確な図像が形成されたようである。

Ⅲ 〈Zoodochos Pigi〉の聖母

Ⅱ章でみたZoodochos Pigiの祭礼は、現在も聖ヨハネ修道院の聖母チャペルで行われている²⁰⁾。E.Colliasは、聖母チャペルの至聖所に表現されている図像（〈中風者の治癒〉、〈盲人の治癒〉、〈サマリアの女〉）は、Zoodochos Pigi聖母の典礼と関係があるのではないかと考えている²¹⁾。14世紀以降に製作された〈Zoodochos Pigi〉のアイコンに、聖母子像表現や画面の構成において、Ⅱ章でみたセオトコスとしての聖母像と共通点が多いと思われるので、次に二つの作例を取りあげて概観してみたい。

1. オディギトリア修道院所蔵のアイコン（図10） クレタ島（ギリシャ） 15世紀

このアイコンの作者は、15世紀のクレタ島を代表する画家の一人で、ポスト・ビザンティン時代におけるクレタ派絵画の基礎を作ったアングロスである。

聖母の首のあたりの両側には、HZΩOΔOXOΣ ΠΗΓΗ（Ζωοδοχος Πηγη）すなわち生命の泉の意味の銘が金地の背景に書かれており、シンプルな構図とモチーフの扱いによって、〈生命の泉の聖母〉のイメージが簡潔に表現されている。

幼児イエスを胸の中心に抱いた聖母が座したまま入っているのはチャリス（聖杯）型の水槽で、この聖水杯の二つの穴からは、下の長方形の水受け（プール）に向けて、水が蛇行しながら流れている。

〈Zoodochos Pigi〉図像は、14世紀にはまだ存在していたコンスタンティノポリスのZoodochos Pigi修道院に、実際あった大理石製水槽から流れる水の状景と聖母子像を組み合わせて作られたといわれている。大理石製水槽がすでにチャリス型をしていたのか、図像形成の過程でチャリス型になったのかは不明であるが、いずれにせよ、チャリス型には聖餐の意味も暗示されているように思われる。

2. ジュネーブ芸術歴史博物館所蔵のアイコン （図11） クレターヴェニス 16世紀

このアイコンの作者は、署名からクレタ派の有名なニコラス・パツァスではないかと考えられている。

登場人物の多い説話的場面にしては、画面全体の構図はシンメトリーにまとめられ、聖母子像も、聖母と幼児イエスの顔が各々反対方向に傾けられているものの、伝統的なセオトコスのタイプである。

聖母子像の両脇には手にリボンを持った二天使が飛びかかっており、画面の上半分に関する限り、これは典型的な〈二天使を伴う玉座の聖母子〉タイプといえよう。二天使が持つリボンには「生命のほとばしる水はその胸に受ける者に挨拶を」という意味の言葉が記されており、これは文字通り、Zoodochos Pigiの典礼から写しとったものではないかと思われる。

さて、画面の下方には様々な人物が描写されているが、まずチャリス型の聖水槽とプールに目を向けてみると、ここにはめずらしいモチーフが確認できる。黄金色のチャリスの縁には三つの頭だけの小天使が、そしてその間には、花のガーランドが彫り刻まれている。さらに下の段では、三人の裸体の天使が水盤を持ち上げる格好で配されている。この天使達の間にはライオンの頭があり、その口から下の長方形のプールに向かって水が勢いよく流れているのが見える。さらに中央に同様なライオンの頭がついたプールの中では、裸体の男女がチャリス全体を支えながら横たわっている。

次にチャリスの左側をみると、包帯を巻かれた赤児を抱く女性と、デビル（悪魔）を見つめる腰布をまとった男性がいる。そして右側には、ライオンの口から流れ出る水によって顔を洗う女性と、その女性の頭上に手をかざすやはり腰布をまとった男性がいる。M.LazovicとS.Frigerio-Zeniouは、この図像は、ニケフォロス・カリステス・クサンソポロスが『教会史』の中で記述している内容に対応したものであると指摘しているが²²⁾、これはつまりZoodochos Pigiの典礼を意味していると考えられる。

結び

Zoodochos Pigi（生命の泉の聖母）としての明確な図像が形成された大きな原因は、14世紀にクサンソホ

ロスがZoodochos Pigiの新しい典礼を創作したことに
あると考えられるが、Zoodochos Pigiの祭礼自体は、
すでにみてきたように9世紀頃から知られており、
Zoodochos Pigiの要素を持ったイメージが、14世紀以
前にあってもおかしくないといえよう。したがって、
聖ヨハネ修道院聖母チャペルにおけるアプシスの《玉
座の聖母子》図にも、そうした可能性が推測できるの
ではないだろうか。何故なら、アプシスがある至聖所
の壁面には、後のZoodochos Pigiのアイコンにみられる
ような水に関するヒーリングの場面（《サマリアの
女》、《中風者の治癒》、《盲人の治癒》等）が表現
されているからである。こうした図像群と一緒に考え
る時、聖母チャペルの図像プログラム全体に、
Zoodochos Pigiの祭礼が反映している可能性は高いと
思われる。この観点から、《アブラハムの歓待》と
《二天使を伴う玉座の聖母子》の二つの図像の組み合
わせの意味を考える時、12世紀の聖母チャペルのア
プシス壁画においても、その後のポストビザンチン時代
にみられる作例においても、組み合わせの必然性が理
解できるのではないだろうか。

すなわち、セオトコス（神の母）を意味する《二天
使を伴う玉座の聖母子》図に聖餐を意味する《アブラ
ハムの歓待》図が加わったものからは、セオトコスの
聖餐という図式が導き出され、それはZoodochos Pigi
の祭礼（典礼）を暗示する、ということである。

さらに、《アブラハムの歓待》図には、三人の天使
への歓待場面であることから生じた、三位一体の象徴
を担う図像としての役割もあることを考える時、この
二つの図像の組み合わせからは、当然のこととして、
三位一体の教理と深く結びついたセオトコスとしての
マリア像が浮かびあがってくるであろう。由にイメ
ージの上では、父なる神・子なる神・聖霊なる神の三つ
の位格に加えて、神の母の位格が加わることになるの
である。

西ヨーロッパの西方キリスト教世界では、三位一体
に組み込まれた聖母マリア以上の図像が現われている。
15世紀フランスで製作された《開く聖母》像は、
閉じた状態では右胸に幼児イエスを抱える聖母子像で
あるが、観音開きにすると三位一体像が見えるしかけ
になっている。一歩進んでここでは、聖母マリアは三
位一体の神を胎む（含む）者として表現されているの
である²⁰⁾。

以上のことを総合的に解釈する時、次のような仮説
も成立するのではないかと思われる。すなわち、三位
一体による人間への救済の秘儀の中へ、聖母マリアが

参入していく過程において、Zoodochos Pigiの祭礼が
深く関わっていたのではないか、ということである。

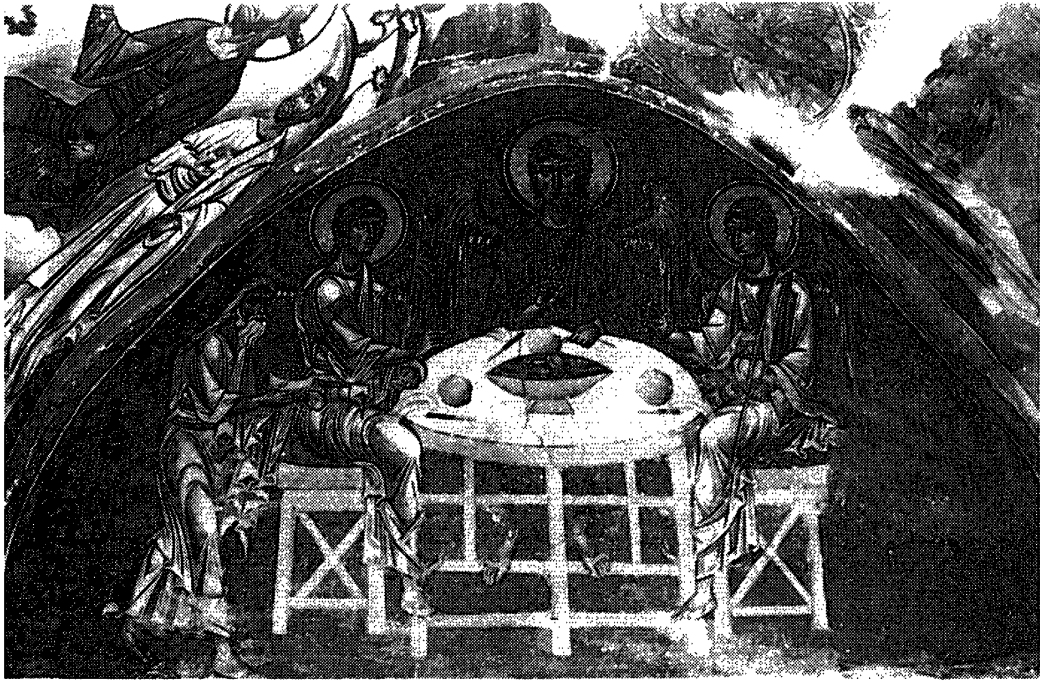
興味深いことに、パトモス島は昔から、水がない島
として知られている。したがって、12世紀に聖ヨハネ
修道院が創建された折には、生命の水に対する思いが
神聖な願いとなり、「生命の泉の聖母」への祈りが喚
起されたであろうことは、想像にかたくない。

1607年には、当時の聖ヨハネ修道院の院長によって
ホラの町の東側にZoodochos Pigi女子修道院も建立さ
れており、パトモス島におけるZoodochos Pigiの伝統
が強く感じられる。こうした経緯を考慮するならば、
聖母チャペルの図像プログラム全体を解釈していくう
えでも、Zoodochos Pigiの祭礼からの影響は無視でき
ない重要な要素であろう。今後の課題としていきたい。

注

- 1) 『黙示録』の著者に関しては、異説もある。
- 2) パトモス島のクリストドーロス修道院に宛てた、
1088年5月付けのアンナ・ダルシアからの帝国
公文書の写しが残っている。
- 3) 聖母マリアへの崇敬が高まるとともに、聖母マリ
アの母親であるアンナへの崇敬も深まった。パト
モス島の伝統によれば、同名を持つアンナ・ダル
シアを記念して設けられたといわれている。
- 4) 横川典古、《アブラハムの歓待》図像：平安女学
院短期大学紀要NO.31（2000）pp.10-19
- 5) 横川典古、パトモス島の聖ヨハネ修道院における
《アブラハムの歓待》図像をめぐる一考察：平安
女学院短期大学紀要第33号（2001）pp.16-25
- 6) M.Chatzidakis, *Icons : PATOMOS* (Ekdotike
Athenon 1988) p.115
- 7) A.N.オヴチニコフ, M.S.トウバチョヴァ, E.V.
ログヴィノフ著『ロシアのこころ・アイコン展』
（1992-1993）p.120
- 8) ……印は著者による
- 9) エフラム・ヨン, フィリップ・セール著, 西野嘉
彰訳『アイコン』K.K.リブレポート（1995）p.104
- 10) キリスト教の天使において、天使階級の最高位に
位置付けられている。旧約聖書『創世記』の中で、
楽園にある禁断の生命の木を守る役割を持つこと
で知られている天使。
- 11) M.Lazovic, S. Frigerio-Zeniou, *Catalogue LES*

- ICONS, Du Musee Dart et D' histoire Geneve*
(1985) No,25
- 12) 高橋栄一, 辻成史『聖山アトス』:世界の聖域
講談社(昭和56年) p.27
- 13) ディミトリエ・ボグダノヴィチ, ボイスラヴ・J・
ジューリッチ, デヤン・メダコヴィチ著, 田中一
生, 鐸木剛訳, 『ヒラندگان修道院』恒文社(1995)
pp.56-60
- 14) K.Weitzmann, THE Icon, George Braziller Inc,
(1978) pp.42-45
- 15) J.Lowden, *Early Christian & Byzantine Art*,
PHAIDON (1997) pp.138-141
- 16) A.グラバール著, 辻左保子訳, 『ユスティニアヌ
黄金時代』新潮社(1969) p.403
- 17) J.ユングマンによれば, 4世紀から6世紀という
キリスト論争が吹きあれた大防戦の中で, マリ
アの四大祝日(就寝祭, 被昇天祭, 神のお告げの
祝日, マリアの清めの祝日)が, 東方世界で成立
した。J.ユングマン著, 辻保子訳, 『古代キリスト
教典礼史』平凡社(1997) p.218-219
- 18) A.グラバール著, 辻左保子訳, 前掲書p.410
- 19) *The Oxford Dictionary of BYZANTIUM*, Oxford
University Press (1991) p.1616
- 20) E.Kollias, *Wall Painting: PATOMOS*, Ekdotike
Athenon, (1988) p.62
- 21) Ibid., pp.61-62
- 22) M.Lozone, S.Frigerio-Zentou, op.cit,No.9
- 23) モニカ・ライシュ=キースル著, 内藤道雄訳「造
形芸術におけるマリア崇敬とマリア典礼」[マリ
アとは誰だったのか]新教出版(1993) p.288



〈アブラハムの歓待〉



〈二天子を伴う玉座の聖母子〉

図1 聖ヨハネ修道院聖母チャペルのアプシス

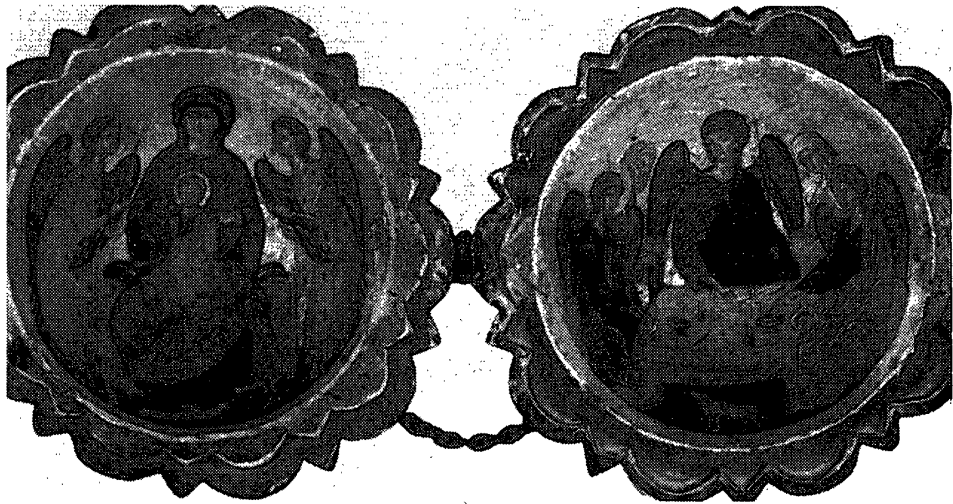


図2 聖ヨハネ修道院所蔵のパナギアリオン



図3 せいうち製のパナギアリオン（モスクワ）



図4 ヒランダリ修道院所蔵のイコン

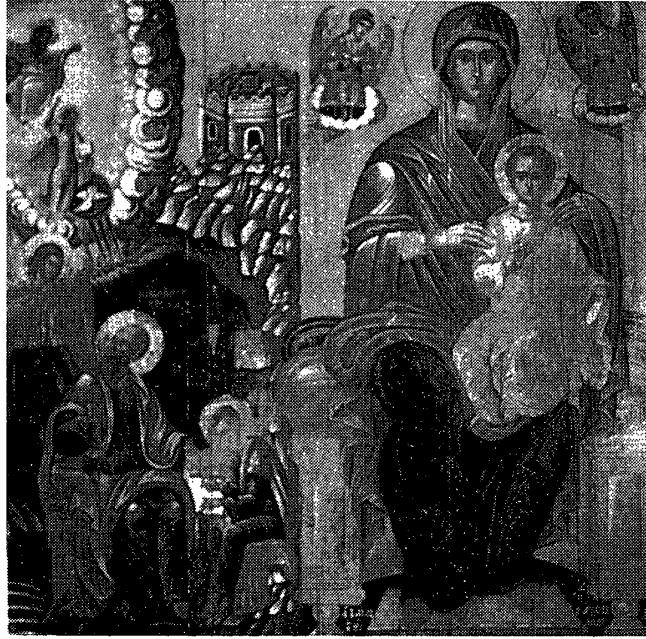


図5 預言者エリア修道院所蔵のアイコン



図6 聖カテリーナ修道院所蔵アイコン



図7 象牙板アイコン



図8 エウフラシアナ教会堂アプシス・モザイク



図9 サンタポリナーレ・ヌオーヴォ聖堂身廊モザイク



図10 オディギトリア修道院所蔵アイコン



図11 ジュネーブ芸術歴史博物館所蔵アイコン